

資料紹介 『昭和六年木脇藤次郎日記』(二)

丹 羽 謙 治

前号に引き続き、『昭和六年木脇藤次郎日記』(仮題、鹿児島大学附属図書館蔵)のうち、四月一日から八月三十一日の百五十三日分を翻刻して紹介する。

以下、簡単に日記のなかの特筆すべき事項について述べる。

藤次郎は、四月七日、侍医の中江佐八郎から、三月二十六日に帰省した玉里島津家の田鶴子のもてなしのために、どのような郷土史関係書類を提示したらよいか相談され、兄の弥太郎が島津忠濟(田鶴子の亡夫)から拝領した忠濟自ら描いた武者絵を貸し出している(五月五日返却)。また、四月八日には藤次郎が整理を続けてきた玉里邸の蔵書を収める書庫に田鶴子を案内、同月九日に田鶴子が東京に戻った後も、需めに応じて郷土史関係の古書の購入に奔走する姿が日記に見えている。また、六月十日には玉里邸からの依頼で旧二の丸にあった島津久光ゆかりの「蔵胞場」「御年比の松」の碑石の調査を行っている。

西郷南洲(隆盛)等の墨跡の鑑定依頼は相変わらず多い(四月十三日、五月二十四日、六月六日、同十四日、同二十二日、七月五日、同二十二日、八月一日、同四日)。

三月に史談会の再興(本文には「中興」とある)が決議されたが、その活動の具体的な動きが書き留められている。

たとえば、四月二十三日には寺田屋事件殉難諸士七十年祭が市公会堂

で開催された。樺山可也市長を發起人として神式で催された祭典で、有志の寄付を募り執り行われた。これより先、四月十四日には主催者側として勝目清助役、鎌田学務課長らと、鹿児島史談会のメンバーである伊地知峻、家村助太郎、伊地知茂七、池田米男、平田猛、それに藤次郎が会合している。また、六月十三日には、城山公園の浩然亭で会合をもち、史談会の会則を決め、伊地知峻を会長とし、併せて弘安の役六百五十年と薩英戦争を記念した会を開催することを決定、これは数度にわたる準備会を経て、八月二十三日に開催された。藤次郎は「旧記雑録」より弘安の役関連の記事を探して謄写しており、藤次郎の役割の一端が垣間見える。同二十日には再興史談会の初の委員会が開かれている。

一方、時期は前後するが、四月三日、岐阜県から鹿児島に「薩摩義士平田鞠負君木像遺牌等」が到着、義士祭典が四月二十五日に鴨池の忠魂堂で開催された。参列した藤次郎は、鹿児島県教育会の石神今太より、木像とともにもたらされた海蔵寺の証文(「義士死去に付葬り方差入れ寺證文」)の謄写を依頼されている。同木像等は五月十四日に鹿児島を離れた。五月六日より藤次郎は「墨所」「筆所」に関する聞き取り調査を行い、設置時期、場所などその由来について成果を挙げている。

五月二十一日には、史談会会員で鹿児島新聞記者の池田米男が、甲冑研究家の山上八郎(一九〇二、一九八〇)を連れて木脇家を訪問した。この『日本甲冑の新研究』(一九二八年刊)の著者は、江戸後期の有職故実家栗原信充(柳庵)の来鹿が真実であったか否かを確認するために藤次郎を訪問したのだが、藤次郎は「先生の膝に乗り、草紙のひら仮名にて書たるものを讀」んだと、自身の体験(当時数えて六歳)を語った。

藤次郎の私的な方面についても見ておこう。二月に末娘の春子を嫁が

せた藤次郎であるが、この時期、藤次郎は愛媛で亡くなった三男の祐利の墓石を注文、玉里邸行き途中、草牟田にあった石材店にしばしば立ち寄って指示を与えている。一方、長男の祐之からは、勤務していた朝鮮の炭鉱の閉鎖に伴い、退職して帰国するとの連絡が四月三十日にあった。藤次郎は「致し方なき事ながら不景氣の祟り、民政党政府の緊縮政策に依る失策は誠に迷惑千萬なる次第也」と記している。五月十日、祐之一家は鹿児島に戻り、藤次郎夫婦と同居、その後慌しく子供部屋や浴室の改造が行われている。しばしば木脇家を訪れ、藤次郎を悩ましているのは藤次郎の姉常つねの子、すなわち甥の彦太郎（当時六十二歳）。日記に見える有馬勇二（同五十九歳）はその弟である。藤次郎は住み込みの女性の動きを書き留めているが、下女や彦太郎の記述がかえって藤次郎の性格をあぶり出し、この日記の魅力を高めている。

凡例は、前回に掲載したので割愛する。なお、五月六日の記事については、日記帳の末に「補遺」があるので、便宜上、今回同日の続きに、これを挿入していることを断っておく。

〔付記〕

本翻刻は、JSPS科研費（16H03475）基盤研究（B）「鹿児島県の歴史資料ネットワークの実践と展開」の成果の一部である。翻刻の許可をいただいた鹿児島大学附属図書館に感謝の意を表す。



四月一日（水曜）「天氣」晴、風、霞 「寒暖」やゝ冷 「豫記」今日より／國産品博覽會／鴨池にて開かる 「發信」祐吉／よし子 午前、児玉利之来る。和孝の台湾受験は失敗せし由にて、十助の宅訪問せりとて同家方パイナップル罐詰二個預り来れりとて持参し、また藤土産に呉れたり。女中へ十円渡す。兄の罰金足しにするものゝ由也。

四月二日（木曜）「天氣」晴 「豫記」日本画大成／第一回配付 「發信」祐之へ（は）／沖雄熊／寺崎文太 「受信」春子

今朝九時過、一昨夜の御禮の爲め玉里御邸へ参上、夫より草牟田の石屋に至りしに、墓石は出来居りしも未だ手洗鉢なし、主人不在に付不明なるも、四日の午後にして呉との申出あり。困つたもの也。出かけ白尾氏へ戸口迄挨拶に出る。

吉田書店へ申込置たる日本画大成第一回配本、光琳派分一冊配付を受く。代金二円と持込料十匁拂渡す。

四月三日（金曜）「天氣」晴

今日は薩摩義士平田鞆負君木像遺牌等到着に付、鹿児島駅迄出迎を爲し、夫方明石屋に至り、菓子發送を要する祐之、祐吉、貞、淑、春の住所等を示し頼み、其他の菓子は明朝可成早目為持遣し方申し置き帰る。蜜柑五十匁買来る。十匁に三個也。

四月四日（土曜）「天氣」晴 「發信」寺師／宇都宮

午前武局にて五拾円引出し、墓石の代の準備を為す。夫方鹿兒島駅へ小松侯奥方、令息の御出發を見送り、帰りに十五支店にて小さく交換して貰ひ、正午帰宅。昼食、直ちに墓地の花屋に至り、石工を待つに大に遅延、三時過ぎやうく到着し早速建立に取かゝり、七時前、父上様御墓を高くする工事と祐利の新墓及手洗鉢、全体竣工せり。夜入時分帰宅せり。お廣来る。

今日枝を頼み、祐利の一周年祭粗菜、親類中へ配る（高麗餅、木李羹、かる羹、型菓子、みかん）。両有馬、白石、是枝、押川、熊野氏なり。重信氏へは小包に出す筈なり。祐之、祐吉、貞子、淑子、春子方へはかるかん苧箱つゝ、明石屋方直接送り貰ふ事とせり。猶、貞子方へは犬童、海老原両家へ半箱つゝを同封せり。

四月五日（日曜）「天氣」晴 「發信」祐之、祐吉、春子方へ「受信」高橋電

今日は故祐利が一周年の忌辰に相當り、其故、午前中一寸町へ出で、供物用果物一円式拾弔當がもの買ひ来る。祐之方態々供物料五円送りしに依る。加治木方敏子、卓雄来る。午後一時過、建部神社神官鳥集氏来り、祭典を行ひ呉られ、夫方酒肴を饗し、長時間緩々談話し帰り行かる。加治木の子供等も帰り去る。今日も枝来り、朝から納屋の買物などして呉たり。約五円程なりき。

祐利に關し、差向きの行事は第一段落となれり。八幡濱の高橋熊栄氏方祭典に關する電報を寄せられたり。加治木方供物料十円、い十院方弔、枝方一円、熊野氏方一円、是枝氏方五拾弔恵與ありたり。

四月六日（月曜）「天氣」晴、風ふく 「豫記」カ 「發信」永田幹愛／高橋熊／栄、正本旅館／吉沢繁一／高橋へ返電 「受信」祐吉／（犬童／海老原）

午前九時頃發足、草牟田内野次郎石工に至り、墓石20円、手洗鉢12円其他刻字、運搬費、増工事費代等迄、合計拾九円支拂。夫方明石屋に至り、八幡濱土木出張所の永田幹愛氏、高橋熊栄氏、正本旅館主人へかかるかん苧箱つゝ送呈方頼ム。別に慶田陶器店に至り、爛瓶二個、盃五個、代金五円の分、記念かたぐ御禮の心持にて町役場技師吉沢繁一氏へ送呈方頼み置き帰る。荷造送料迄五円六拾弔弔なり。伊集院の兒玉利久来る。鴨池に居る前田の二女遊びに来る。嫡家の梅子どの入来、長話して帰り行かる。三月節句の菓子持参あり。また、祐利への供物料一円持参ありたり。振替にて三円五十弔、大阪岡田製作所へ安樂正座器一臺注文せり。お廣の頼みなりし故、直接振込人を本人名前とせり。

四月七日（火曜）「天氣」晴 「發信」小田肇（封）／小田かつ（〃）／宇都宮（連名）

早朝中江佐八郎國年来訪。今日三時より、玉里御邸御後室様及量子姫御來臨の筈にて、郷土史関係書類何か御覧なり度趣なれば、何がよろしかるべきや相談に來たとの話なりし故、薩藩叢書一篇より四篇迄と地理纂考との五冊を同氏に渡し差出したり。三時前來て御對手して呉との話、兎も角参るべしと承諾す。午後、祐吉より則江養子縁組届書提出方申来りに依り、市役所に至り差出せしに、届書式に合はずとの事なりし故、祐父殿へ頼み、代書人等へ書かせ方依頼し置き、夫方中江氏に至り、忠

濟公少年御時代のいたづら書の武者繪一卷、御覽用に供する為差出し置。やがて御來駕（湯地、大野、大竹山、松元、房村其他）拜謁の後、南檢の老師匠及小手遊の地方にて、名取りの藝者二人と外に若手藝妓二人と舞を御覽に入る。夕前御出立あり。跡にて皆打揃ひ拝祝の酒のみ始まり、藝者達一諸に御馳走に預る。九時頃帰着す。

四月八日（水曜）「豫記」米倉に頼みし／火鉢出来上る。「受信」
沖

昼前、谷川久饒氏外一名來訪。南洲先生書幅、芭蕉布へ五絶（松野相知「清の結句アルモノ」鑒定を乞はる。出来よろしく印章は不判明なるも、南洲の印に缺損の箇所なく、極めて正しき様なり。無難の品なる旨を告げ、大によるこびて帰り去らる。おひろ、博覽會見物に行けり。午後、帰伊せし趣なり。早朝、祐父殿戸籍の書類持参せられたり。

午後、玉里御邸へ御禮かたぐ／参上せしに、弥明日御出發との事にて、今夜すし賜はる趣にて、是非用なければ居れとの事也。御後室様御蔵書庫御一覽あるに付御説明申上げよとの事にて、目錄携へ御供して庫の上下共立派に整理しあるを御覽、九良賀野氏より全く木脇の骨折りなりと申上げ、二三書籍箱御開き御覽あり。夜入過を關係諸氏相集り、御書院にて酒賜はり、御両方御出席にて例之通、中江氏の俗謡など出、十分にいたゞき帰宅。（自働車にて御送り付り）

四月九日（木曜）「天氣」晴 「豫記」合織頼む。20.との事。

今朝十一時前、玉里御後室様御出立に付、御見送りの為め鹿駈に至る。

定時御發車。見送り多数なり。前中島一師校長の出發も同時なりし為め、見送り人込み合ひたり。夫方山口洋服店に立寄、合コート一枚頼み置く。代金貳拾円との事なり。又、大社酒店へ立寄り、特製福娘二升買ひ代拂4.40、為持かた命じ、米倉國松方に至り、火鉢手入及網張代八円五十匁渡し帰宅せり。本日喜之助來りて裏の畠耕し種蒔等して呉れたり。淑子出鹿兒八日行との文ありしも、同日來らざりし故、或は翌日になりしかとも考へし故、十一時四十分着の肥薩線の入車を待ち受けしも來らず。一時間を空過せり。

四月十日（金曜）「天氣」晴 「受信」寺師

午前重信吉十郎氏、文昌帝君、老子の圖、支那の道教の本尊を持参し、文武、周公、成王の圖と思ふとの事なりしにより、之は琉球邊には沢山来て居る通俗的の画にて、画としては余り價値なきものなれど、枕崎方面の出と云へば、古渡りの画かもしれないと返事せり。午後武の湯に行く。

四月十一日（土曜）「天氣」雨

終日無為に暮せり。小田氏系圖書始む。

四月十二日（日曜）「天氣」曇後晴

今日も何処へも出ず。悠々消日せり。小田氏系圖書浄書も幾分執筆せり。

四月十三日（月曜）「天氣」晴 「受信」市役所を通知／伏見烈士祭典の件

今日は明石屋の拂と川村訪問の心算にて門外へ出し処、中原尚友氏來訪

に付引返す。南洲先生敬天愛人類面鑒定頼まる。一見、偽物たるを指摘して真蹟にあらざるを説く。同氏は今朝伊地知峻君へ見て貰ふ考にて在宅問合せしに、只今木協訪問に出かける処なりとの返事ありし故、よき序なりとて先回りをして来られし趣なりしが、十一時頃迄いぢゞ来られざりし故帰りに去らる。昼食に取掛り箸を取りし際、伊十院の利孝来り一緒に昼食し、しばらくして伊地知氏来訪。南洲先生書幅、舊苑荒臺楊柳新の唐詩七絶無印章の分、鑒定書及箱書頼まれ、鑒定書は伊地知氏連名とせり。話中、白石家秀子さん見舞に来られ、鶏卵及供物料持参あり。其内、利孝は帰り、お秀殿は猶しばらく話して帰り行かる。其以前、伊地知氏は帰り去らる。明日四時より市役所にて史談會員等と文久伏見九烈士祭典一件協議會を開く筈故、出席方の話あり。夕方、市役所方も通知来る。

四月十四日（火曜）「天氣」晴 「發信」大洲町役場／戸籍係

昼食後、武局に至り五拾円引出し、馬場活版屋へ至りしに名刺未だ出来居らず。前拂ひし置し代金六拾錢取返、明石屋に至り、菓子代四拾六円八拾錢仕拂ひ、山口洋服店に至りしに、藤武喜助、枝元常太郎外二氏来り居らるる処なりし故、暫時話し、二三日中に出来上るとの事聞きて、木市見物に行き、四時少し前に市役所に集合せり。主催側、勝目助役、鎌田学ム課長、田中書記外一名。伊地知峻、家村助太郎、伊地知茂七、池田米男、平田猛、外に河田藤助氏杯参来る。二十三日、伏見九烈士及水島、永田両士の七十年祭典執行の件議せられ、樺山個人名義發起として祭典會ヲ催す事とし、神式ヲ以て公會堂に於て挙式と決し、市役所員にて諸準備を整へる事となれり。費用は有志會員にて一円位ツ、の出金な

らば沢山の見込、祭丈莊嚴にすれば茶菓と宜敷との話あり。帰りにトマト苗十莖（十四本□）買ひ来る。

四月十五日（水曜）「天氣」雨（※欄外に「○」印あり）「發信」

正本の／土居六郎 「受信」正本の蒲鉾／永田幹愛／重信／みわ子

午前、谷川久饒君外一名来訪。先日鑒定を乞はれし南洲先生書幅に鑒定書を買ひたしとの請求ありしも、箱書や鑒定書は無用の長物、却て他日の煩累を求むる種となり、且故竹下盛隆翁と約せし、人によりて真偽の意見を二にせぬ事や鑒定書書かぬ（此件虚言）事などを話し謝絶せり。午後、女中町へ行く。

八幡濱町正本旅館土居六郎氏より、返礼として名産板付蒲鉾十五個惠贈のもの到達す。即時禮状、女中便にて出す。八幡濱土木出張所。

四月十六日（木曜）「天氣」晴

午前、彦太郎来る。失禮して出かけ、女中を連れて御墓参りを為す。夫方農工銀行に至り、債券利子三円余をうけとり、夫方藤武紙店にてキング紙二千枚一締.98にて買ひ、持たせ貰ふ事とし、梅北にて冒散三十錢の分買ひ、山形屋にて昼食に江戸すし.40食ひ、薩摩人形、島大根背負女一個.45買入し、石鹼一個同断、夫方鹿兒新社（マ）に至り名刺頼み、美術展覽會一覽、郵便局にて用紙買ひ、夫方電車にて玉里参邸、御安着の御左右承知し、五時頃退出帰宅せり。

四月十七日（金曜）「天氣」晴

午後出かけ、武局にてい十院氏の五円と大童氏の二円との小為替請取り、

夫方川村方へ関ヶ原記の草稿を返戻し、且ツ刀二振り、故俊秀氏へ研き方頼み置きし分の行衛に付きたゞし方申入れ置く。山野田氏、四本持て行かれたとの事、其内に忠吉はありはせぬかとの疑あり。歸りに小杉にて海貴来^{4.00}、安楽散^{2.00}買ひ、木市にてポンカン苗三本、富有柿三本^{.20}買ひ来る。また天華堂にて山梨へ送る菓子^{.70}買ひ来る。夜入方、夕食史はに、沢田迎音と云ふ人、池田米男氏の紹介とて高山彦九郎の事蹟を尋ねられしも、何分食事最中と云ひ、余り無遠慮の訪問なる上、全然高山子に聞スル智識なきを以て、其旨断り歸らしめたり。斯学に熱心なる感心せしも、疲労之上、晩酌にて酔裏の為め失禮せり。

四月十八日(土曜)「天氣」曇 「發信」みよ子

午後、山梨の則江へ送る菓子と人形、小包にて發送せり。夫より武の湯に入り、歸りて、昨日買ひ来りしポンカン三本、富有柿三本の植方を為す。夕方、樺山委員長方廿三日伏見九烈士祭典の件通知書、使丁下池持参せり。

四月十九日(日曜)「天氣」曇、黄塵にて霞む

終日在宅。大掃除の準備を為せり。午後、女中の友達来りて厄介になれり。

四月二十日(月曜)「天氣」曇、小雨 「受信」大洲町役場

枝来りて大掃除を為したり。
い十院氏と春子に手紙書く。

四月二十一日(火曜)「天氣」雨 「發信」い十院氏夫婦へ 「受信」

祐之

今日、女中町へ出る便にて、い十院氏と春子へ手紙出す。
園田殿方玉菜四個惠與せらる。

四月二十二日(水曜)「天氣」小雨、後止む

午前、湯地定敏氏方乍勝手私宅へ来て呉との使来りしに付、十時半出かけ面會せしに、足に腫物の為引籠り中にて自由の願との事にて、明後日土方日銀総裁来躰之筈に付、接待の為め各所見物の説明等の任に當り呉との事なりしも、到底任に堪へずと謝絶し、十二時武局に至り、二十円請取り、市役所に至り、明日の祭典の打合せや申込を為し、伊地知峻、横山直次郎、中山盛蔵氏と出合ひ、一緒に圖書館に至り、明夜の會の申込を為し、夫方山幸洋服店に至り、コート^{1.90}の代式拾円拂渡し、新聞社にて名刺六十枚拂ひてうけとり、名古屋方出張賣出しの紫檀細工店にて莖管式個^{1.90}にて買ひ、慶田にて小一輪^{1.50}買ひ歸る。

四月二十三日(木曜)「天氣」晴

午後二時出かけ、市公會堂に於ける寺田屋殉難諸士七十年祭に参列、莊嚴盛大なる祭典にて、無事終了。直ちに鹿兒島の史談會主催の該事件の集談會に臨み、是亦百十数人出會、非常なる盛會にて、十時頃散會せり。

四月二十四日(金曜)「天氣」雨又晴

午後五時過、大口のよし子、末の子二人と女中二人を伴ひ来りたり。知覽の舅殿病氣の為め、全家帰省し、知覽よりの歸り途中、博覽會見物を済まし、見國殿と上の二娘は大口へ歸りたる由なり。

四月二十五日(土曜)「天氣」晴 「發信」西岡市代書狀／並に記

念品／町役場 「受信」春子、觀櫻御會／参列のしらせ／田尻氏禮狀

午前、淑子一行五人、買物や石井熊野両家訪問の爲、町へ出たり。昼食後、女中を武局へ遣し、伊豫大洲町看護婦西岡市代へ、祐利一週忌の記念品サツマ焼一輪差花瓶を小包にて發送せり。春子方書狀とゞく。去廿日、新宿御苑に於ける觀櫻の御宴に夫婦参列の光榮に浴せし由にて、其節の御菓子少々送ると申来れり。容易ならぬ。田尻種經氏より母堂死去の時の禮状来る。午後三時出かけ、有馬勇二方へ行き、故姉上一周忌に参拝出来ざりし詫を述べ、夫より高等農林学校内の前校長玉利喜造博士の告別式に参席して帰る。夕食後、鴨池に於ける難擊義士祭典に参列し、退散の際、九良賀野氏の誘引に依り食堂に立寄りしに、酒のみとなり、染川堂主と三人にて酒を五本のみ帰る。義士死去に付葬り方差入れ寺證文寫方の件、教育會石神氏方頼まる。一応試みた上受合うと返せり。

四月二十六日(日曜)「天氣」晴

今朝九時十五分發の汽車にて淑子歸るに付、駅迄見送り、夫方途中、藤武紙屋と吉田に立寄り、紙30、鉛筆15買ひて鴨池に至り、寺證文寫方なり。二時頃帰宅す。午後四時前、共研會の春季大會總會、親睦會に出席、八時頃歸る。是枝氏に立寄る。

四月二十七日(月曜)「天氣」晴 「受信」春子小包／みよ子、は

今朝も鴨池の忠魂堂へ文書寫しに行く。食堂にて昼食□、午後五時迄に

て終了。夫方玉里島津邸東京詰土岐弘君夫婦歸塵出迎の爲め、鹿駅に行き、大坂屋で菓子二種1.02買ひ、ナゴヤ紫檀店にて燭瓶袴二□、灰吹籠二ツ14買ひ歸る。
春子より送りし觀櫻會の御菓子とゞく。

四月二十八日(火曜)「天氣」雨

午後、武局へ祐吉之送金請取に行き、海津店にて蠅取紙10、蚊取線香、歯みかき粉買ひ、又のみ取粉も中途にて買ひ歸る。
早朝、恩賜のお菓子開きを為せり。紅白菊桐の型菓子なり。

四月二十九日(水曜)「天氣」曇、小雨

今日の天長節には天候不良の爲め、外出せず。午後、明治十六年頃、百五十二銀行計算方して居りし旧知人、鶴野武次郎氏来訪。四十年振りに面會せり。妻君朝稲氏の墓参かたゞ、来麿之由にて、二三日は山城屋に滞在の筈との事なり。
東京への手紙書く。

四月三十日(木曜)「天氣」晴 「發信」い十院氏へ禮／加治木と

大口へ幟送る。「受信」祐之辭職の報
午前、村役場へ縣稅九十四錢納付。序に東京の春子方へ禮狀出し、湯に入り歸る。昼食後、町に出て山形屋にて加治木と大口に初幟の祝に鯉幟一流づゝ送り方頼み(送料迄三、六八)外に嫡家分、太刀一飾1.70買ひ来り、又吉田やにて日本画大成(第二回配本)一冊2.10と下村紙屋にて半紙20、蠟燭二箱46とを買ひ、窪田米屋へ六円七拾錢拂ひたり。

祐之が廿八日付の書信にて、愈々炭坑休止退職の事となり、来月五六日出發歸國する旨申来る。致し方なき事ながら不景氣の祟り、民政党政府の緊縮政策に依る失策は誠に迷惑千萬なる次第也。今後之生活状態、余程難問なり。

五月一日（金曜）〔天氣〕晴 〔發信〕宇都宮、寺師、／幟送呈之件 〔受信〕大洲の西岡市代々／礼状

早朝出かけ、武局にて貳拾円請取り、十五銀行支店にて株券、祐之分二株、拙者分一株請取り、明石屋にてかすてら壺箱^{2.60}買ひ、坊中馬場の土岐弘君の喬居を訪ひしに不在なり。依而、菓子を甥純一氏夫人へ頼み退出。夫方川村純二宅を訪ひ、南洲先生傳、勝田氏原稿の分、松下、測辺、有馬其他先輩諸君ヲ南洲寺に來臨を願ひ、川村氏筆を執り、事實相違其他疑は敷点など書入を為せし分を借用し、小田床屋にて髮刈鬚剃り、山形屋に至り單衣羽織無地に縫紋一ツにて仕立方頼む。反物代^{10.20}なり。四五日間に出來上る筈なり。下村紙屋にて巻紙^{.50}、状袋^{.35}にて買ひ歸る。留主中、土岐弘君夫妻來訪あり。味付海苔一罐、土産に惠贈ありし由。明後三日茶つみノ筈。

五月二日（土曜）〔天氣〕晴 〔發信〕寺師慎氏へ見舞朝、公設市場に至り、梨子三個、林檎六個^{.90}にて買ひ、持參せし籠に入れ小包にて知覽の寺師慎殿へ病氣見舞かたく、御禮に贈呈し、夫方山城屋に鶴野武次郎夫婦を訪問せしに、不在にて逢ひ得ず。帰途、大社に酒二升^{4.40}為持貫ふ事に頼み置き歸る。

五月三日（日曜）〔天氣〕晴 〔豫記〕酒來る

午前早々出かけ、大山綱任君の病氣を見舞ふ。好経過なり。小林勇熊、鮫島宗幸氏も見舞ありたり。唐筆二本惠與せらる。十一時過、新照院岩下貞太郎氏を訪問、中途方菓子壺折り⁴²初めての訪問に付持參せり。幸、在宅にて、十二時過迄古写本の調査方なり。随分郷土史關係のもの多し。是非御保存置き給はり度旨頼み置き、四五部借用して歸る。縣道筋に出ると、コサン竹の子賣に出逢ひ、六把⁴⁵買取り、萬が娘の歸り便に頼みて宅へ届け貰ふ。^{.05}遣はず。昼過歸宅。竹の子荷造りして東京の春子へ送るべく西駅に持參し、鉄道便に托す。^{.75}かゝる。歸り道にて、中江喜次郎氏と同道、南山、曙山、宗信合作の画讚、殿様の寄合書と申傳へあるもの一見して呉との事にて、一緒に立寄り一覽せしに、画は順聖公と外一名、讚は公家衆と見受けたり。取調べて御返事すると、暫時話し歸る。女中みつの姉と亭主來る。今日は茶摘にて、生葉五貫四百八拾匁ありたり。

五月四日（月曜）〔天氣〕晴 〔發信〕春子へは書 〔受信〕加治木／鶴野（は）

今日は終日在宅。朝、女中の姉來りて女中と一緒に町へ出て、昼過歸宅せり。其便にて春子へ、竹の子送りし通知のはがき出す。

五月五日（火曜）〔天氣〕晴 〔發信〕茶出來たり。

早朝、女中を連れて墓參を為し、鴨池の忠魂堂に至り、教育會頼の寫字の事を尋ねしに、和尙、霧島へ行きしとて不在なりしも、品残り居らざる故、多分教育會方取に來られしものと推定し、十一時前歸宅す。昼食

後間もなく、長友彦一氏来訪、二時間位話し帰らる。枝来り、製茶持参せり。五貫五百目分、三円三拾弍拂ふ。

五月六日（水曜）〔天氣〕晴 〔受信〕玉里電話

八時前出かけ、薬師町自彊学舎隣、尾上彦太郎氏を訪問。墨所の一件を尋ねしに、子供の時の事にてよく記憶もなく、書類なども残り居らぬがとて、同氏の父君兄弟三人共に筆製作の方にてあり。また、開始は不明なるも、廢藩と同時に関係者共同にでもありしか繼續はしたりしが、十年役で焼失せしまゝ絶へたりとの事。また、原田房太郎氏に尋ねたらより以上判明するならんとの事に、浄土宗の寺へ参り聞合よと教へられ退出。夫方中江佐八郎氏訪問。忠濟公御筆の武者繪巻物うけとり、土岐氏歓迎會の發起を為し、山野田一成氏訪問せしも不在。（※「補遺〇」と頭書）圖書館にて謄寫料うけとり方の話あり。教育會に至り、寺證文の件請取りありしやを尋ね、市役所にて、田中栄助氏に中洲へ通学方の件内々尋ねしも、絶對禁止故到底出来ぬよし承知し、縣廳會計課にて謄寫料一円六拾弍弍うけとり、夫方浄土宗に原田氏を訪ひしに、病氣にて辞して静養中との事故、下荒町（マヤ）の自宅を訪ひ、墨所の事を尋ねしに、此人の父か順聖公御時代に京都より筆の教師として雇ひ下されしものにて、勝守の流義との事。初め松原小学の処に筆所建てられ、後墨所と合併せしものなり。又、墨は▲―以下補遺。

〔補遺〕

五月六日のつゞき

薩州新川製とあるは京都の製墨の新川と云ふ所にて出来しを取りて、頭に薩州を冠して薩州新川製とせられしものなる旨、たしかに聞とゞけた

り。夫方暫時相話し、未だ尽さぬ処ありしも、病中との事故、差控へ、ソコ／＼に歸り、高農にて花園を一覽して帰宅せり。〇夫方照國神社勝元十富も住居せし処の城山上り口の園田才治氏僑居を訪ひ、昼餐の御馳走を受け（うなぎ、さしみ、むき身の汁）

五月七日（木曜）〔天氣〕曇後雨 〔受信〕祐吉はがき

昼過、女中の兄の妻子訪ひ来り、一泊。玉里方三時電話来り、今夕の會出席の有無を尋来る。早速出かけ、武局にて廿円うけとり、山形屋にて單衣羽織代十三円余仕拂ふて立出る時より雨降り出す。夫方玉里邸に至り、夜入前方九良賀野氏の土岐氏招宴に参る。山口、中江、土岐、岩崎、東郷、重久、濱島、土崎氏夫婦、主人と妻君と令嬢と予の人数にて、支那料理の御馳走あり。十一時過散會、帰宅せしは十二時過なりし。

五月八日（金曜）〔天氣〕雨

今日終日在宅。岩下氏蔵本の抄出に暮せり。女中の兄よめ町へ出る。

五月九日（土曜）〔天氣〕晴 〔受信〕貞子／春子

本日は早朝より女中を博覽會見物に遣す。一円小使に與ふ。夕方歸り来る。

五月十日（日曜）〔天氣〕晴 〔受信〕祐之方電報、今夕／六時つ

く

午前、教育會事務所に至り、薩隅日地理纂考一部買受く。玉里御後室様御注文に係る。代金參円也。夫より御菓子を買ひ来る。幹子、哲子来る。午後、女中を列れて納屋に出、取肴や吸物肴買ひ、女中は買物して帰れと命じ、夫より安樂散一円ノ分買ひ、桑原表具師へ立寄り、武駅に祐之一家の出迎ひに出る。無事之到着に付、自動車にて帰宅せり。

五月十一日（月曜）〔天氣〕大雨 夜風強

祐之は子供二人の入学一件と荷物うけとりのため、予は玉里行のため、雨を冒し出かけしに、予は懷中を忘れ一旦帰り、昼食後再び出かけ、シヤボン漬二箱^{1.75}にて買ひ、御注文地理纂考と共に玉里邸に持参、土岐氏に進呈の手續を為し、夕方迄時間作りを為し、九良賀野氏と同伴、伊呂波屋の土岐君歓迎會に出席ス。會するもの四十名余、二次會迄ありて帰途に就き、十二時帰宅せり。枝より祐之安着を祝して鮮魚惠與せり。

五月十二日（火曜）〔天氣〕曇

祐之は男児二人を列れて、田上の小学校に行く。予は土岐氏夫婦見送りのため、鹿兒島駅迄行き、正午前帰宅す。嫡家梅子どの来訪。魚二尾惠與ありたり。昼食後、祐之等六人博覽會見物に行く。

五月十三日（水曜）〔天氣〕晴 〔受信〕國彦

祐順、祐信、今朝より田上小学校へ入学に付、祐之同行、綾子も行く。帰途、町迄回りし由なり。予は終日在宅。

五月十四日（木曜）〔天氣〕晴 〔受信〕松崎鶴雄（轉居のは）

午前、薩摩義士位牌出發に付、見送りのため出かけしも、時間間に逢はず。朝日通にて下車、市場にてきうり三本²⁴、武にてサヤエンドウ買ひ¹⁰帰る。

五月十五日（金曜）〔天氣〕大雨 后旋風

終日在宅。

五月十六日（土曜）〔天氣〕晴 〔豫記〕焼酎 〔發信〕加治木へ
午前、風呂入りに武へ行く序に、宮田通迄郵便出しに行き、帰りに小サ竹の子四把買ひ来る。³⁶なり。午後、祐之一同、町へ出て土産物など買ひ来る。公會堂にて大坂三越の出張販賣あり。彼處にて買調へし由也。

五月十七日（日曜）〔天氣〕曇

祐之等一同、親類回りを為す。

五月十八日（月曜）〔天氣〕曇 〔寒暖〕やゝ冷 〔受信〕宇都宮

／漢詩、國語

午前、武局にて拾円受けとり、炭團屋、木炭屋へ注文し、墨屋へも頼み、松野屋にてシヤボン漬一円丈買ひ、木村屋にてパン¹⁵、昼飯に買ひ、玉里参郎。三時退出。新照院町岩下家訪問。古文書類一括り、^(マ)冊借用シ帰る。本人よりは、連毛有りても蟲付文なれば、何か役に立さへすれば返戻に及ばすとの話なり。

五月十九日（火曜）

五月二十日（水曜）

五月二十一日（木曜）〔天氣〕曇　〔豫記〕山上氏來訪

午前、池田米男氏、山上八郎氏と山内邦夫氏兩名を案内し、鎧研究の爲來らる。正午少し過、帰り去らる。栗原柳葺先生ノ來麿は間違なき事とは、自分は信ずれども、鹿兒島の先輩村田經芳先生が栗原氏の久光公拝謁は江戸田町の御屋敷での事で、鹿兒島へ下られたる事はなしとの説を唱へられ、夫ヲ信する人も往々ある故、確める爲め來麿せられし旨、池田氏紹介せられたるに付、當時の記憶に残れる事ども、並に先考より時々話をきゝしものなど話し、來麿ありし事は間違なし、現に先生の膝に乗り、草紙のひら仮名にて書たるものを讀みし事などありし旨を述べて證とせしに、満足せられしものゝ如かりし。

五月二十二日（金曜）〔天氣〕晴

午後、祐之荷物來着に付、喜之助來て貰ひ、一部分荷片付、荷解等なり。終日在宅。

昼前、有馬氏、是枝氏より娘等各鮮魚惠與の使に來る。太郎吉來る。

五月二十三日（土曜）〔天氣〕晴

今日も荷物始末の爲め、喜之助、早朝より來り呉れ、五時頃迄にて終り歸る。

昼前、彦太郎來り、昼食を食ひ、三時頃歸り去る。

五月二十四日（日曜）〔天氣〕晴

今朝、大島籠郷の人、和様書、長崎先生風の書、朗詠ら敷を奉書に書たるもの、矢張り御家流の落花の雪のきれ〜になりたるものの極めて古くなり、内ボロ〜に湿氣の爲めになりたる様の物、及樂焼茶碗一ツ、池田米男氏の紹介にて持参し、西郷先生の書とか云傳へるもの、鑒定して呉とか、言語不明、聞取れず。故に、書は鹿兒島にて御家流の名筆の方々が手本に書て給はりし品ならん、茶碗は京焼にて良好の品と見受る故、茶の湯の先生方に鑒定を乞はれたなら、大變珍重せられるもの歟と、此方の云ふ言葉丈云ひて歸へす。有馬勇二來る。長女縁組の件相談旁、歸麿見舞なり。縁談には賛成し置けり。午後、彦太郎來り、夕方歸り去。虎二殿來訪、ビール、菓子、土産なり。夕食出し、夜入前歸り行かる。今日も家内中にて荷片付方なり。大工來る。子供部屋、湯殿見積、七十円位との事也。熊野よし子泊來訪。有馬勇二來る。

五月二十五日（月曜）〔天氣〕晴　〔發信〕寺師慎、同見國、／正樹さんの御祝

押川直一氏來訪。鮮魚一尾土産なり。愛子の病状、良好の由。誠に仕合之次第なり。今日より大工來り、子供勉強部屋改造に取かゝる。未知の人兩人、屋敷などの話、世間話などして長話して歸り去らる。白尾氏屋敷賣買一件に関し、参考の爲ならん。夜入方、女中みつの父來り、夜入過歸り去る。鶏卵持参、土産なり。

五月二十六日（火曜）〔天氣〕晴

今日も終日騒々敷日を暮せり。

大工終日也。

電燈代二円、大毎代一円三十匁拂ひ貰ふ。

五月二十七日（水曜）〔天氣〕晴 〔受信〕祐吉為替

今日は片付け方加勢せず、終日不氣分なり。有馬勇二方、娘俊子明日結婚式ヲ挙るに付、参列して呉との案内状来る。参席の旨返事す。今夜、燈火管制演習、飛行器防禦あり。二回の消燈あり。枝か娘と一人の友達と二人連にて来り、しばらく蓄音器など聴て帰り行く。今日方浴室設備にかゝる。

大工も終日なり。

舎費取に来る。二十匁拂ひ貰ふ。

五月二十八日（木曜）〔天氣〕晴

今日も終日風氣分にて休養せり。早朝、有馬氏へ祝五円、肴代二円、女中に持たせ贈與せり。午後、有馬氏方使にて誰でも列席して呉との事なり。祐之に行て貰ふ。

今日も大工、左官来る。

五月二十九日（金曜）〔天氣〕晴

今朝、有馬氏婿山下正彦夫婦、母殿、暇乞に来らる。午後、中島彦太郎君来訪。足弱り歩行困難に見受らる。且つ余程老衰の状あり。彦太郎来

り、夕方帰り行。左官は休み。大工は終日なり。建具屋来り、ガラス戸、窓等の箱メ方せり。今夜十一時の汽車にて出發に付、祐之見送りを為し、十二時前帰宅せり。

祐吉方の三十円、其儘祐之へ渡す。教育會方海蔵寺蔵寺證文謄寫料として参円為持遣はさる。受領證提出せり。

西郷^{彌家の女}智恵子殿来訪。初幟のまき持参。来六月一日、茶飲に来て呉との事也。

五月三十日（土曜）〔天氣〕曇 昼方雨

今日は左官来り、浴場塗方なり。吉田方日本画大成（三回分）為持来る。二円十匁拂ふ。午後三時前、是枝菊子来訪。小松實氏血統聞合也。湯殿工事終了。三十五円にて出来上ル。

五月三十一日（日曜）〔天氣〕晴 夜入降雨

午前、祐之、子供ヲ連れて萩原秋彦氏訪問旁、買物に出かけたなり。白石周一殿来訪。正午少し前に帰り去らる。終日不氣分にて在宅。

六月一日（月曜）〔天氣〕晴

終日在宅。のど工合よろしからず。

夜入過、有馬勇二来り、十時迄話す。夜話は迷惑なり。

午前、鴨池西郷氏迄、人形と肴代、女中に持たせ不参の旨申遣す。

六月二日（火曜）〔天氣〕晴 〔發信〕春子へ送金60

昼食前に出かけ、武局にて四十円引出し、祐之の國債利子二十七円

八十八匁請取り、内より廿四引去り、四十円へ合せ、書留にて春子夏衣帯地代として送金せり。夫々浄光明寺下薬屋に湊式吸入薬買に行きしも、品切故、小杉薬店にて安楽散四円五分、三円四十匁にて買ひ、大坂屋にて菓子七拾匁買ひ、帰宅せり。彦太郎来り、夕飯食ひ付け、九時迄長坐、歸り去る。毎日の夜話には困ル。話は終始妻の噂也。祐之、昨夜より發熱、今日終日臥床。

六月三日（水曜）「天氣」晴 「受信」九良賀野氏

終日無事。祐之や、よるし。午前、税納めに役場に行く。七拾八匁也。夫より武の湯に行き、垢を流し歸る。

六月四日（木曜）「天氣」晴 「寒暖」冷 「豫記」留主中／祐之高熱／中江醫師来／診ありし由 「受信」貞子

早朝、彦太郎来、二分のみ返戻、妻女の南洋行の一件一式例の如し。午前、玉里邸御注文の薩藩叢書の採擇用にて町へ出かけ、縣廳前の古本屋に至りしに、一、三、四丈、一冊三円との事。今井に行きしに、新本完備せり。價は一冊六円との事。余り高價、人を馬鹿にするも甚し。一版の二篇もありて、矢張り六円と云ふ。夫々市役所へ至り、祐吉の戸籍謄本を祐父殿に頼み、圖書館へ至りしに、三時方史談會の委員會開かるゝに付出席せぬかと館長の話。後刻出席すべしと答へ、鶴木古書店に至り、尋しに一方四迄アリ。二円五十匁ツ、との事也。夫々昼食のパン十匁丈買ひ、玉里邸に参りしに、九良賀野、濱島両氏共、谷山御屋敷実測の為め行かれし趣、不在也。二時半退出。再び圖書館に集り、来十三日午後六時より浩然亭にて開會、池田二中校長の講演ある事に決し、有馬吉太

郎氏頼みの関ヶ原遺物脇差に史談會として遺物なるを認むとの書付を書く。いち、湯地、奥田、家村、池田、市来、肝付、樋渡等参集。

六月五日（金曜）「天氣」晴 「寒暖」冷 「豫記」湯殿初使用

終日在宅。彦太郎来る。お墓参りの歸りとか云。重信虎之進殿来訪。先達て祐利の祭典に菓子送りたる答禮として供物料一円おく。枇杷志盛、土産也。嫡家祐父殿、祐吉の戸籍謄本持参呉られし由。

六月六日（土曜）「天氣」晴

午後町へ出、小田床屋にて髪摘鬚剃り、夫々圖書館に至りしに、館長、池田、家村、市来氏にて通知状發送方也。加勢し、夕方帰宅せり。途中菓子買ひ来る。重信氏より祐利の祭に答禮として一円包まれし故、供物用としての分也。

午前、高山出身とかにて山之内俊彦と云ふ人、南洲の書持参、鑒定を乞はる。國分南洲としても余程拙なり。見込なき旨返答せり。

六月七日（日曜）「天氣」曇、小雨 「寒暖」温

終日在宅。東郷重毅氏、令嬢二人を使として、玉里御邸より先般の進上物の御答禮として東郷、大迫両氏と拙者へ金三円封金傳達せらる。一円を受領し、残余を二円丈、再、令嬢に返戻せり。

六月八日（月曜）「天氣」曇後晴 「豫記」小菊挿芽せり 「受信」

春子方二通／藤田轍志郎

今日終日在宅。祐之、町へ出る。無事。

六月九日（火曜）「天氣」晴

早朝春子方の頼、山本氏娘殿貫ひ受聞合の爲、熊野芳子さん邸を訪問、聞合せ方頼む。實母の姉さん伊勢氏へ話て見たら判明すべき旨にて、今日山岡氏へ行く序に立寄り尋て見て呉るべき返答也。折柄、高山公通氏夫人来訪ありたれば、一二談話の後、退出。裏馬場にて山の田一成氏と出逢ひ、忠吉の刀の事尋ねしに知らぬとの事、序に中江氏へ刀を研ぎし故見せに行くとの話にて同道を促かさる。共に中江國年を訪ひ、暫時話して後、辞して玉里御邸へ至りしに、九良賀野、濱島両氏とも今日も亦谷山の別邸へ参られしとの事にて不在。輒ど正午退出。途中、西田にて黒糖二斤28買ひ、ブリキ屋に立寄りも先達頼みし茶壺出来居らず、其儘引かへし帰宅せり。午後、棚片付の加勢也。中山多計土殿夫人来訪。何とかウエーハー一箱手土産なり。暫時話し帰り去らる。

六月十日（水曜）「天氣」曇、後小雨

早朝、重信吉十郎氏来訪。話央、玉里方電話にて、本日午前十時頃山下町の方へ出かけて呉との通知あり。八時過、重信氏帰り去られ、九時過出かけ、城山下御年比べの松跡地に至り、正十時到着。早速碑文騰寫にかゝりし処、濱島氏と小使と共に来られ、十時半頃九良賀野氏も来られ、共に寫し方なり。終了の頃、正午少し過、新聞社池田氏尋来られ、一緒に昼食喰ひに天文館通新設道路の江戸吉といふに案内さる。鰻飯、寿し、海など出、緩々三人で話し合ひ、同所にて別れ、帰りに熊野さんに昨朝頼み事の返答きゝに行きしも、不在故帰宅せり。祐吉へ送る茶のブリキ罐買來る。百目入、二十錢也。

六月十一日（木曜）「天氣」終日雨

今朝より降雨つゞきにて終日やまず。白石氏方鯛一尾、態々恵贈せらる。終日、昨日の碑文の清書に暮らす。

六月十二日（金曜）「天氣」晴 「豫記」史談會準備／として委員

／集會の事

早朝、熊野氏へ参り、山本氏令嬢の左右を聞く。伊勢氏口振ては、六ヶ敷方なるも、十三日ヨリ後直接山下氏の意向をたしかめしらすとの話なりし由。夫方東郷重毅氏を訪問し、文之ノ書二幅、玄岱の書一幅、井上良吉君摸探元龍の画等を見、夫方重信下駄やにて日より下駄買ふ。一円廿七錢也。其儘帰宅。

六月十三日（土曜）「天氣」晴 「豫記」史談會／五時より浩然亭

／會費七十錢 「發信」春子／祐吉／みよ子（は）（小包茶）

午前、田中雄藏氏来訪。本日の史談會へ出席方の件話さる。差支なき故御出席あり度しと返答し置く。昼飯早々、祐之等六人、加治水へ行く。伊十院の利之来り、二時前帰り行く。三時より史談會へ出席、今夕五時開始之筈。圖書館に立寄り、山口某氏、奥田氏と共に會場浩然亭に向ふ。序に御年比の松の碑石之内、先日落手のの分取調へ、補缺して會場に赴く。今夕出席者五十七名、池田二中校長の講演アリて、會則を協定し、田中雄藏氏の發言にて伊地知峻氏ヲ會長に推薦し、承諾ヲ得、幹事は後日會長指命して定むる事に定めることとし、佐多中将方、弘安役方六百五十年にも本年相當スル處、旧曆八月十五（※六と上書か）日は薩

英戦記念日にて、其前日であるから一緒にして盛んなる記念會を催したしとの話に一同賛成、追而両方話を纏める事にするとの旨報告ありて、夕食を共にし、九時散會せり。

六月十四日（日曜）「天氣」晴

午前十時、圖書館に行き、伊地知峻君と昨夜約束したる南洲書の鑒定の為め^{ゆゑ}な。南洲、甲東二幅持参あり。仙臺を送り来りたるもの、由。甲東は石版摺の疑あり。南洲分は真物なり。箱書頼まれ書く。序に奥田館長の東郷元帥筆の一幅と元帥自身執事名にて御禮品拝受の御禮状と、東郷吉太郎氏の元帥へ依頼して置たから出来次第送付するとの通信文の巻物へ箱書と表題を書く。江戸吉の鰻めしにて昼食の御馳走にあづかり（池田、奥田も）分れて豎馬場の薬店へ湊式吸入液買に行き、液の三円にて買ひ、夫方永江國擴氏を訪問せしに、隣の折田一郎氏方へ行かれ不在との事に付、折田氏を訪問し、両氏の圍碁二面見物し、帰途に就き、市場にて水苔少々買ひ、青梅を尋しに、縣農會の監獄跡市場ならあるならんとの事にて引かへし、小川町の監獄跡迄行、尋しに、千日市場には小賣あらん、未だ時々出て来るとの話、夫迄にて帰宅せり。

六月十五日（月曜）「天氣」晴

終日在宅、御年較の松碑文浄書に日を暮らす。

六月十六日（火曜）「天氣」曇

午後、祐之等五人町へ出る。（開封無用）焼きすつ。

六月十七日（水曜）「天氣」晴

午前、熊野様へ山本家の返事聞きに行く。矢張、令嬢は台湾へは遣はし難しとの返事なりし由也。夫方農工銀行にて、勤債利子三円餘うけとり、洗粉、諸あめ、パン買ひ、青梅さがせしも見出さず。夫方玉里に蔵胞場の碑文、清書の分差出し置き、更に所在地圖面、碑石位置など取調の上寫取提出の約束せり。帰りに武局にて、書道全集代一円六十八錢振込む。

六月十八日（木曜）「天氣」晴 「發信」春子へ 「受信」春子方

午前、嫡家方初轍りのまき配られ、廿日に来て呉との事なり。午後出かけ、武局にて漬梅を小包にして春子へ送る。山本家令嬢貰ひ受けは、台湾へは遣らぬとの返事申遣はず。夫方市役所に至り、土木課々長永吉氏に面會、二の丸御年比の松の位置の實測圖寫取方願ひ、幸ひ課員に寫させ呉る。之に依り、三度蔵胞場跡に至り、石碑の位置等書き入れ、探勝園の記の碑文を寫し初めしも、漫漶多く到底不明の処^{（ハ脱カ）}サルを以て中止し、建碑年号と撰者名ヲ寫し、夫方帰宅せり。

六月十九日（金曜）「天氣」雨

終日無事。

六月二十日（土曜）「天氣」雨、後晴 「豫記」史談會委員會

（※本日は旧五月五日に当たる。）

午後二時出かけ、圖書館に開かれし更始の史談會初委員會に出席、総員出席、分擔など極め、常任、奥田、池田、山崎、市来、家村の五名とし、池田、樋渡、湯地、牧、予の五人は單に委員とす。過日の史談會にて池

田俊彦氏の講演「薩藩最初の海外留学生及外交」の原稿を整理し、印刷に付し、會員等へ頒つこととし、六時頃散會。帰りがけ嫡家五月の節句の御祝宴に参り、十時頃帰宅せり。

六月二十一日(日曜)〔天氣〕雨

終日籠居。午後、嫡家方座ふとん返戻ありたり。袴一件大間違あり。後分明せり。

六月二十二日(月曜)〔天氣〕曇　〔受信〕春子方兄の就職／一件

正午前、山下英一と云ふ人、南洲先生の書を携へ外二人と来り、鑒定を乞はる。昭和商會福岡支店勤務との事也。同地方持参の極めて乱暴な書方、似ても付かぬ品故、其旨説明し歸へす。午後便、春子。

六月二十三日(火曜)〔天氣〕曇、雨

午前、中江喜次郎氏来訪。しばらく話して歸らる。

六月二十四日(水曜)〔天氣〕雨

終日在宅。無事。

六月二十五日(木曜)

終日在宅。無事。

六月二十六日(金曜)

終日在宅。無事。

六月二十七日(土曜)〔天氣〕曇

午前出かけ、金風にて菓子一円丈買ひ、又パン二十枚、昼食用に買ひ、玉里参邸。九良賀野氏不在故、濱島氏へ御年比の松碑位置畧圖を渡し、夫方菓子を持って伊十院兼熊氏の病氣見舞に行く。しばらく話し、少々氣分悪かりし故、直様帰宅せり。今日は城山植物に關スル講演會ヲ圖書館に開催あり。植物陳列もある筈なりしも、終に行かず。

六月二十八日(日曜)〔天氣〕晴

午後、お墓参りかたぐ、鴨池動物園見物として、恭子、子供と女中を伴ひ出かけ、六時前帰着せり。午前は女中、女の子供二人を連て中江醫院へ葉取りに行けり。

六月二十九日(月曜)〔天氣〕曇、晴

終日在宅。祐之等六人、町へ出る。

市役所方弘安役六百五十年祭及薩英戦争紀念賀委員會、来月八日午後二時、同役所に於て開催に付、出席方通知来る。

六月三十日(火曜)

七月一日(水曜)

七月二日(木曜)〔天氣〕小雨、時々晴

祐之、中江醫師に行く。

七月三日（金曜）「天氣」雨

七月四日（土曜）「天氣」雨

七月五日（日曜）「天氣」雨

午前、鹿兒新社池田米男君案内にて、市収入役い十院勝吉君及同氏郷里財部村水保永瀬瀨氏を伴ひ、同氏の親戚とかに當る脇田とか云ふ家に秘蔵の南洲先生書翰三通、三巻となり居るを持参、鑒定及賣價を乞はる。誠に三巻共申分なき手紙、一は流謫中、大、税、有、吉宛（大久保、税所、有村、吉井）宛、一通は鹿兒島方在京の大久保宛、一通は京都方鹿兒島御側役蓑田傳兵衛宛、総て時事に関係あり。参考史料となすに充べきもの也。無紛真物と答へ、値は目下時季悪き為不明なりと申置けり。共に金さへあれバ慾しきもの也。

七月六日（月曜）「天氣」晴

午前、役場へ税^{1.87}納に行き、夫方朝日通にて髪かり、魚芳に酒注文^{1.80}し、石づろにて鯉節^{1.20}二本買ひ帰る。（※値段はいずれも右傍書）夜入過、南洲先生書翰寫淨書を了へ、嫡家祐父君へ頼み、市役所伊十院君へ送ル。

七月七日（火曜）「天氣」晴

終日無事、在宿。

七月八日（水曜）「天氣」晴 「寒暖」暑し 「豫記」弘安役

六百五十年祭／委員會、市役所にて／二時より

昼食後、武局にて拾円請取り、内にて書道全集、國語と歴史、漢詩講座、三ヶ所へ送金頼み、夫方市役所に至り、い十院氏へ南洲書翰の件聞合せしも膳寫摺立も出来居らず、且、長瀬氏も市役所に來るとの事なれども未だ見へぬとて全く不得要領にて、夫方公會堂に開催の弘安役六百五十年祭及薩英戦争の紀念會準備協議會に出席。協定を為し（出席、樺山市長、佐多中将、いぢ、峻、湯地定敏、池田二中校長、池田鹿兒新、牧堯朝、家村助太郎、奥田啓市、浅野常瑞、市來政敏、鎌田精一、田中榮助、岩崎弥八郎、福田武吉等の諸氏。）

帰途、萩原小路の山田克己氏宅を訪問、南洲書幅二、甲東無印一、南洲手本一、一覽せり。南洲は二行物「挙枉捐諸直則民不服南洲」とある分丈真物、他はダメ也。夫方帰宅。

七月九日（木曜）「天氣」晴、雨

早朝、椅子を顛覆さして椽より庭へ墜落、後肩骨部をすり剥がす。頭と右足にも些少の打バクを受けたれども、格別のことなし。仕合なり。夜になり、右足打搏のあと見出せり。山上氏へ手紙書く。

七月十日（金曜）「天氣」晴雨不定

終日在宅、無事。

七月十一日（土曜）「天氣」大風雨 「發信」山上八郎氏へ

夜来の豪雨に風力さへ加はり、河水氾濫し、道路危険を覚へ、祐之は九時過、祐順、祐信の保護に田上小学迄行く。近年未曾有の水害、各地へ起り、市内にても死者数人あり。本日、照國神社にて第二回國旗祭ある筈にて、宮司方案内を受け居りしも、天氣の爲め不參せしが、祭典最中、矢田宮司夫人は崖崩壞にて壓死されし由、誠に氣の毒之次第なり。午後は雨も停み、平静に復せり。朝九時過、風雨やゝ弱りたる頃、荒田の消防組其他人々七八人、孟宗竹を防水用として分與して呉との事に付、小サキ側にて葉付の多きもの方六七本遣はず。いづれ後方挨拶すると云殘して去れり。

七月十二日(日曜) 「天氣」 雨 「発信」 祐吉へ

七月十三日(月曜) 「天氣」 曇、小雨

午後、圖書館に至りしに、館長、矢田宮司へ悔に行くところにて、同道促され一緒に行き、夫方小杉葉舗へ行き、安樂散四円の方とカユサ止め、塗劑。

七月十四日(火曜)

七月十五日(水曜) 「天氣」 曇 「受信」 橋本徳太郎氏

今朝、木切人夫来り、もがし、楓、一ツ葉等大部分伐採せり。午前中、彦太郎来り、夕飯後歸り去る。夕刻方祐之等一同、鴨池稲荷六月燈へ行。下女、千石馬バ迄行き、十一時歸り来る。

七月十六日(木曜) 「天氣」 曇、小雨 「発信」 橋本徳太郎氏(は「受信」 十院兼明/染川春彦/貞子 對馬の寫真

今日は木切来らず。朝小雨の爲か。十院兼明、染川春彦氏、水害見舞はがき。加治木の貞子方對馬の寫真など送り来る。

七月十七日(金曜) 「天氣」 晴 「豫記」 午後二時方/市役所に於て/弘安、薩英両紀/念委員會

今日は木切り来り、樟木の枝すかしなどに終日也。内金二円五十錢又渡す。

一時少し前、出かけて市役所へ集會す。勝目助役、いちゝ、池田米、牧家村、橋口、湯地(代り肥後)、淺野、市役所方鎌田、平山、田中、岩崎諸氏其他出席、協議。弘安役及薩英紀念會の議案を決定し、發起人各分担など定む。五時散會、帰宅せり。天文館通にて菓三種買ひ歸る。朝鮮山下正彦、俊子方暑中兼水害見舞はかき到達せり。

七月十八日(土曜) 「天氣」 小雨、晴 「寒暖」 摂氏三十度 「受信」 十院兼清、春子

樹木伐採雇人、今日迄にて解雇す。三日間一日一円拾錢ツ、賃錢なり。兼清、春子兩人より、雨水被害見舞はかき到達せり。

今日方祐之またマラリヤ發し、休息せり。今晚、故川村氏と夢に緩話、終りには梅耐(ウヰ)など酌て歡談に時を移し覺めたり。めづらしき長き夢なりき。痴人に等しき事ながら、死別後はじめての事なる故、特に記載す。右隣り隠居と境界に石垣を建設に付、立會吳との事、萬介来り告ぐ。祐之と共に立合ひ、現在の根石迄ならば何等支障なき旨返答す。

七月十九日(日曜)「天氣」晴「寒暖」あつし

午前、彦太郎来る。昼食、夕食迄食ひ、夜入方帰り行。喜之助など来りて、畑への上り口、修理して呉たり。

七月二十日(月曜)「天氣」晴「受信」山上八郎

午前八時半、出發。高見橋畔の上野江山氏へ書宛在りや尋ねに行しに、一ヶ月半計り前輕症の中風に罹りたりとて灸治中との事。書宛は于今其儘にありとの事、夫々中江國年訪問、祐之のマラリヤの病追出しの件、拙者打搏症の手當等話し、折から玉里邸九良賀野氏来合せ、共に参邸。三時過迄在邸。厚地兼通氏所蔵の満尾氏文書を見、また帰途、九良賀野氏へ立寄り、先々代島津左様の文書を見る。貳百通位もあるか、一朝一夕に見尽すべきにあらず。他日を約し帰り来る。押川篤行来り、夕食を共にし、夕方帰り行く。孟宗竹五本賣りたる由、大廉價なりし由。高キ分五十匁に達せず。安きは三十匁に達せざりし趣なれ共、幾らになりしや報告なし。

七月二十一日(火曜)「天氣」時々驟雨

午後五時比、彦太郎来る。徳来り、竹の代四十匁請取ル。

午後、庭の槻を賣らんかとて来りしも、賣らぬと答しに、スクロクは如何との事故、代價を積らせしに、十二円との事なりし故、見合せにするとして是も賣らず。

七月二十二日(水曜)「天氣」小雨、後霽

午後、東千石町居住の人にて林常袈裟と云ふ、先般谷川久饒氏と同道し来りし人、南洲先生小額面、「如虎如龍南洲書」とあり、印は翠亭分なり、出来甚まづく(傑力)。

七月二十三日(木曜)

七月二十四日(金曜)「天氣」曇、小雨

(※「午後、中江國年の宅に行き……」以下五行半を消しゴムで消す)

七月二十五日(土曜)「天氣」雨時々晴「豫記」今日の祇園祭／

雨天の為め明日に／延期の由「受信」祐吉方
午前出かけ、中江醫院にて診察を請ひ、薬貰ひ、暫時雑話の後、退出。帰途、高見橋脇の上野篆刻師に立寄り話す内、驟雨度々到り、晴間を伺ひ、十二時少し過帰宅せり。書宛八、九、十の巻及書画苑三冊程請り(て)帰る筈なりしも、未だ二三冊済まぬ故、二三日中天氣次第、忤に持たせ返りせり。書画便覧借用し来る。祐之、祐順を伴ひ、お墓参

午後、故小田小太郎妻、沖繩の長男成邦病氣の為、大連方沖繩に行く途中立寄りたり。土産など呉れらる。何の用意もなき故、寸志として祐之方二円包む。

午後六時頃方、祐之二行、下荒田八幡宮の六月燈に参り、九時前帰り来る。

七月二十六日(日曜)「天氣」雨

今日より腹工合悪し。服薬之為か。

七月二十七日（月曜）〔天氣〕雨 〔發信〕祐吉へ

今日も終日腹工合悪敷、横臥、日を暮す。書道全集十七回分とゞく。今夜方服薬を中止す。

園田猛彦君、戸口まで訪問せらる。

七月二十八日（火曜）〔天氣〕雨、後晴

終日在宅、無事。

七月二十九日（水曜）〔天氣〕晴

何事もなし。

七月三十日（木曜）〔天氣〕晴

今日朝より衛生掃除、終日なり。

七月三十一日（金曜）〔天氣〕晴

朝、税金本日迄の通知あり、午前九時過、役場に行き納入。

郵便局にて祐吉方の送金四拾円うけとり町へ出る考なりしも、久し振りの外出、少しの歩行にて非常に疲労を感じ、其引かへし帰宅、休息せり。

八月一日（土曜）〔天氣〕晴 〔發信〕伊集院兼清氏

午前、錦江校前のポストへ、い十院氏へ水書見舞の礼状出しに行く。帰りに農事試験場を一覧し帰宅せしに、湯地百四十七頭取より使にて、南

洲先生の「似笑凡桃」云々の大幅鑒定を乞はる。曩に湯地氏の話に、久米田新太郎氏所有の分、岩元善蔵氏へ週旋したりとの話ありしものにて、昨年夏久米田氏手に入りし頃、女婿吉田幸兵衛が同店にて鑒定を乞はれし品なるに付、遣はされし名刺の裏に、傑作に相違なき旨褒めて使を帰せせり。間もなく隣地に家を移し来りし川野老女、来訪あり。引越の挨拶あり。暫時にして帰らる。今夜、千田久米氏来訪。妻の母お隣へ轉居したから今後よろしく頼むとて、十時頃迄話し帰らる。

八月二日（日曜）〔天氣〕晴

午前出かけ、公設市場にて三円の果物盛り籠土産にて、中山多計土君訪問。仲人としての夏見舞とせしに、同氏は就蓐中にて、先日腸の工合悪く血便とかせし為め、醫師に診察して貰ひ、赤痢豫防注射とかを為せしに、其中毒とかにて両日は人事不省に陥り、平安山病院長など非常なる配慮を懸け、昨今やうく快復しつゝありとの事なり。妻君不在、暫時談話之後引取り、吉田書店にて日本画大成七月分未配達ノ件尋ねしに、注文中とかにて要領を得ず。同店従来の店員一人も見へず。主人の妻君カ帳場に坐り居、一人の店員ありて周旋し居たり。夫方大坂屋にて菓子一箱、一円六十五錢にて買ひ、熊野氏へ御禮かたぐ立寄りしに、不在にて、はる子どものへ託し帰る。下女、今夕方枝の宅へ静養の為め行く。

八月三日（月曜）〔天氣〕晴

終日在宅、静養。

八月四日(火曜)「天氣」晴 「發信」小田かつ 「受信」園田泰次、

川村スミ、木□□春

午前出かけ、魚芳にて酒の注文し、ビール二打^{7.50}買ひ、一打は中江氏へ、一打は九良賀野氏へとゞけ方頼み、鶴田店にて扇子20棧買ひ、桑原探玄堂に巻物仕立代金の問合せに行く。不在なり。宝パンにて昼食のパン15棧買ひ、玉里参郎。九良賀野氏不在。午後五時少し過迄、南浦文集寫し(四枚)方なり。帰りしに有馬勇二、石田醫師同道、南洲三幅持参、鑒定を乞はる。二幅は出来悪しきも真物と認め、一幅は全然似てもつかぬ物。夕方帰り行かる。彦太郎も朝方来り居りし由にて間もなく帰り去る。

八月五日(水曜)「天氣」晴 「受信」い十院兄弟/池田米男

今日、終日

午前、川村純二来る。西瓜土産とし持参せり。

い十院重明氏及兄兼明氏、暑中見舞なり。

池田米男君、明日五時より肝付家文書拝見承諾アリシに付同行し度とのはかき来る。

八月六日(木曜)「天氣」晴

午後四時過出かけ、鹿新社に至り、待合せし池田、田中両氏と共に、肝属兼寛氏留守宅へ系圖並古文書一覽に参る。同家は肝付本家にて古くより古文書類を蔵し居らるゝ為め、弘安役関係の有無を調査の為なり。一時間計り三人で閲査せしも、同役関係事件記載せしものなし。依て他日細査の便を呉られ度旨を約し、ともぐく退散帰宅せり。

夜に入り、熊野芳子どの入来、菓子並花持参給はる。明日、老母堂の御

供にて霧島温泉行との事。

八月七日(金曜)「天氣」晴、驟雨来ル

昨日歩せし為か、腰部に例の筋引つり生し、起居に苦痛せり。

八月八日(土曜)「天氣」晴、驟雨来る

今日も腰痛、伏居たり。

午前より彦太郎来り、四時頃促されて傘かりて帰り行く。

八月九日(日曜)「天氣」晴

今日も例の腰痛にて少しは楽なようなれど、終日ゴロゴロして日を暮す。午後、隣家園田猛彦氏自ら来り、葡萄成熟につき、お開きするから来て呉との事なりしも、痛所の為め断り、代りに祐之ヲ差出す。九時スキまで。

八月十日(月曜)「天氣」晴

午前、重信吉十郎氏来訪。入違ひに山田克夫氏来訪。南洲先生の蓼齋高山画賛の分と他三幅にて八百円位に賣度付、週旋頼ムとの事なりし。承知。氣寄りもあらば話し置くべしと答置たり。

祐之等、お墓こしらへに行、歸りに海水ノ浴に行き、正午比歸り来る。

八月十一日(火曜)「天氣」晴

午前八時半出かけ、市役所に至り、学務課田中氏へ弘安役祭の件打合せ、夫方い十院収入役に面會、南洲書翰の件聞合たるも委敷分ならず、自身盆祭に帰郷の際、模様たしかめ来るとの話、夫方圖書館にて薩藩旧

記雜録内に弘安役関係文書を探して謄寫し、午後一時迄大要を写シ、夫方公會堂之食堂にて昼食食ひ、山形屋隣の床屋で髪摘、ひげそり、夫方百四十七銀行に湯地頭取を訪ひ、先日山田氏来嘱の南洲書幅の件頼みしに、兎に角いつか見ることにすると約束あり。胃腸薬買ひ帰る。薪割り、今日方来る。

八月十二日(水曜)

八月十三日(木曜)

女中郷里へ帰る。

午後、菓子買ひ、飯牟礼春長氏の薩摩琵琶レコート式枚^{2.00}にて買ひ帰る。今夜一回機械久しふりに使用せしに、祐之ム茶に使用して早速ゼンマイを折らしたか、逃つしたか、之はダメダと抛出し、氣持よさそうなり。存意頓と不了解、態と破懷せしにあらざるかとも疑はるゝ挙動なり。酔後の為めか不思議く。桑原表具師へ巻物の代尋しに、無料との答、夫ては困るとて一円丈渡し帰る。

八月十四日(金曜)「天氣」晴

午前、川村氏初盃蘭盆に付、線香壱箱、果物少し携帯、拝礼して帰る。今夜、お菊御墓参りの序に鳥渡立寄る。

八月十五日(土曜)

八月十六日(日曜)

八月十七日(月曜)「天氣」晴

午前十時方公會堂に於て、弘安役祭委員會に参列し後、昼食を了し、以下空白下女、今日帰る筈なりしも帰らず。何の消息もなし。

八月十八日(火曜)

八月十九日(水曜)

八月二十日(木曜)「天氣」晴

午前、武局にて書道全集十八回分送金す。夫方小杉薬舖に安楽散^{4.00}(二割引)買ひ、夫方十五支店へ立寄り、また重信にて夫婦の下駄買ひ^{1.78}、あめ屋にて三種のあめ買ひ、孫共へ土産とす。

八月二十一日(金曜)

八月二十二日(土曜)

八月二十三日(日曜)「天氣」晴、風もよう

午前八時出かけ、松原町教応寺に於ける弘安役六百五十年法要に参席、十二時前終了。山形屋にて江戸すしを昼食とし、夫方圖書館に至り、午後五時より市主催の弘安役六百五十年祭典待合せ、後公會堂に行き準備等の加勢を為し、定時参列。豫定の通り祭典終了。夫方公會堂に於ける

直食に参加。講演等にて意外時間を費やし、帰宅せしは十時比なりき。

八月二十四日（月曜）〔天氣〕晴、今朝風もよう也

昼過、下女帰り来る。

今早朝、指宿線鉄道錦江女子校近くにて、若人酔臥し居り、右手を手首方轆断されたとの事にて、見物人あちこちく方来集せるよしなれとも、生命には別条なき様子なりとの話ありたり。郡元邊の人、昨夜永田温泉にて深更迄酒のみ騒きし人々の内なりしかとの噂。

八月二十五日（火曜）

八月二十六日（水曜）〔天氣〕晴

午前、祐順と女中と連れて久しぶりに墓参せり。夫方予丈け町へ出、納屋へ至りしも鱈鯖のみにて送物用にならず。夫方山口歯科醫に行き、修繕の事打合はせ、風月堂にて菓子33匁買ひ、孫共へ土産とす。

八月二十七日（木曜）〔受信〕春子

八月二十八日（金曜）〔天氣〕晴 〔受信〕祐吉送金

祐之、第四百十七銀行行き、序にて諏訪の市見物を為し、ナタ鎌（※鎌の形を図す）一、鑿二、買ひ来る。のみ3.6鎌の値なり。午後、喜之助越中鍬一丁買ひ来る。80匁なり。

八月二十九日（土曜）〔天氣〕晴 〔發信〕祐吉封、有馬文字は／

新尾休八は

午前、祐之夫婦、子供連にて城山登り。朝鮮よりの注文品買入等の用にて町迄出る。予も午前、山口歯科醫へ直の入歯修繕持参、九月一日出来る旨返事あり。夫方扇子20、ばん買ひ、玉里参邸。四時過、退出帰宅せり。九月一日方書籍風入取かゝる積りなり。

八月三十日（日曜）〔天氣〕晴

八月三十一日（月曜）